KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

コーパスデータに基づくdie from と die of の使い分けに関する一考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部
	公開日: 2016-09-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡田, 啓
	メールアドレス:
	所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006262

関西外国語大学 研究論集 第83号（2006年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.83 (Mar. 2006)

コーパスデータに基づく die from と die of の使い分けに関する一考察

岡　田　　啓

0．はじめに

die from/of の使い分けについては，語法辞典にも詳しくない。*OALD* 6th. edition (2000), *Longman Dictionary of Contemporary English*, new edition (2003)『研究社－ロングマン句動詞英和辞典』（1994），*NTC's Dictionary of Phrasal Verbs and other idiomatic verbal phrases* (1993) なども die from/of の違いに関する説明はまったく省いている。いずれも単に例文を与えているのみで，of でも from でも大した相違はないと言う扱いである：

She died of/from hunger/cancer/a heart attack/her injuries. — *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (2003).

最も詳しいものは『英語前置詞活用辞典』（1974）であるが，
die from（人が）＜けがなど＞で死ぬ
die of（人が）＜病気・飢え・老齢などで＞で死ぬ　＜＞は名詞または動名詞
とし，die from は die of の意味にも用いられるというコメントを付け加えているだけである。

2001年に出版された『ジーニアス英和大辞典』の説明が，現時点での大まかなまとめとなっているようである：

[die of と die from] pneumonia, cancer, cold, malnutrition, hunger など病気・体の不調などによる直接的内因には of を用い，wound, explosion, heat, overwork など間接的外因には from を用いるとされるが，実際はしばしば相互に転用される：The victim died of [from] a loss of blood.

被害者は出血多量で死んだ / He died (of) fighting in the Vietnam War. 彼はベトナム戦争で戦死した。[1)]

以下に，上記辞書に挙がっている代表的目的語についてコーパス中に出現した頻度を記しておく。

die from/of + wound (219/262)「コーパス中に from が219例，of が262例出現」
die from/of + wounds (390/561)
die from/of + illness (104/239)
die from/of + illnesses (48/74)
die from/of + hunger (67/359)
die from/of + old age (9/245)
die from/of + malnutrition (54/123)
die from/of + pneumonia (81/672)
die from/of + heat (49/37)
die from/of + overwork (15/18)

from/of は「実際はしばしば相互に転用される」とあるが，どのように「転用されるのか」それをコーパスを検索して調査した。その結果，from が of に転用されると解釈できる場合もあるが，多くの場合，話し手が聞き手に対して何を伝えたいかによって，いずれか一方の前置詞が好まれていることが判明した。

1．die from/of の概略

OF が用いられる場合：

1）一般的に単に死因を表したいとき
2）習慣的に起こる死，繰り返して起こる死に言及するとき
3）of の目的語は原則として，病気・外傷・老齢，ストレス・その他死をもたらし得る原因として一般に認定されている，あるいは容易に認めうるものに限られる。

FROM が用いられる場合：

1）本来，ある具体的（specific）な状況を想定し，その場面において考えられる具体的に死をもたらす原因を指定する。

2）個々に起こる死に言及するとき

3）from の目的語は of の目的語と同じく，一般的に容易に死因となるものも指定しうる。しかし，その他にも，特定の場面でのみ死因となるような目的語を取ることができる。1つには -ing 形，またはふつうでは死因とはならないような目的語，または，ある特定場面に特有の状況などである。

1－2.　die from/of の意味論

一般的に病気などの死因を表すときは of を用いるのがふつうである。この時には，die of + N が一定のまとまりを有する semantic unit として振舞う。die of cancer を例にとって見よう。My father died of cancer というとき，話し手は聞き手の心の中には「人間が癌で死ぬ」という事柄は珍しいことでなく普通に起こりうると了解されている，と見なしている。つまり「癌死」という概念はすでに存在している。「癌死する」と訳しても構わないであろう。「癌死する」こと自体，話し手はもちろん，聞き手や一般の人々の日常ごく普通に遭遇する，よく慣れ親しんだ（familiar）概念として受け取られる。そして，今，記述されている状況が，「癌死」というジャンルに当てはまると見なされるのである。「父は死んだがそれは，一般に癌死と呼ばれる死に方だった」とパラフレーズしてもよいであろう。

これに対し，My father died from cancer. においては cancer に特別の意味論上の焦点づけが行われる。from という前置詞は原因を明示する働きをもつ。「父親はある特定の病気が原因で死んだが，その原因とは癌であった」とパラフレーズするのが適当であろう。2つの文はそれぞれ，以下のように分析できるのである。

a. My father | died of cancer.
b. My father | died | from cancer.

a. の die of ～ というのは「～死する」という，全体として死因に言及する動詞句として扱われている。これに対し b. の from は原因だけを抜き出して問題にする言い方である。話し手は死の原因となった癌そのものに注目する。「死ぬ」の部分は二義的な情報価値しか持たなくなることも多い。

両者の間に，上記のような意味論的相違があるとしても，of で与えられる死因というのは，元々，個々に生起する事例が積み重なった結果，人々によってありふれた，珍しくない死因として認識されるようになったものである。それゆえ，多くの場合，話し手が of に代えて from

を用いることにより原因を明示したとしても，不都合は起らない。die from が die of の代わりに用いられてもおかしくないのはそのためである。しかし，後述するように die from に代えて die of を転用することは必ずしも可能ではない。

2．from/of 両者が可能である場合

下は，新聞掲載の死亡記事の書き始め部分である。まさに of/from の相互転用が可能と解釈しても差し支えない場合である：

◆Terry Patchett, Labour MP for Barnsley East since 1983, died yesterday of cancer aged 56. He was born on July 11, 1940. — *Times 96/10/12*

◆Cardinal Joseph Bernardin, Archbishop of Chicago, died yesterday from cancer aged 68. He was born on April 2, 1928. — *Times 96/11/15*

3．die of の目的語となる名詞

さて，of で与えられる一般的な死因とはどのようなものかまとめておこう：

a. 傷病・症状・正常状態からの逸脱を意味する語（disease, wound, old age, complication, malfunction など）

b. 傷病・症状の具体的名称（stroke, snakebite, fever, convulsion, pain, blood loss, thirst, exhaustion, broken neck, など）

c. その他の死をもたらす主体（poison, virus, drug overdose, exposure, fright, など）

d.「原因」を意味する語（cause, causes）

e. 名詞化していると見なしうる -ing：(poisoning, drowning, drinking, longing など)[2)]

これらの中には，専門用語を平易に動名詞で置き換えたものも含まれる。その意味では動名詞の目的語は die from にのみ続く，とした従来の説明は少々，修正をする必要があるかもしれない。しかし，難解な術語を避けるなどの場合にのみ die of ＋ 動名詞が用いられるだけである。故に，一般には，名詞化した -ing 以外 die of の目的語に来ないとしておくほうがよいであろう。以下に，具体例を挙げる：

drinking [= alcoholism], being alone [= loneliness], choking [= suffocation], hardening of the arteries [= arteriosclerosis]

◆Woodrow Wilson ... lived in the house for only three years - from March 1921 to February

1924, before he died of hardening of the arteries. — *Washington Times 92/06/04*

4．die from の目的語となる語句

死因として of の目的語にくる名詞のほとんどは from の目的語としても現れる。しかし，具体例を詳しく観察してみると，from のみとしか共起しない目的語，あるいは from との組合せが圧倒的に多いものがある。以下にそれらを挙げて，考察を加える。

4－1．特定の場面が設定されている場合

◆As I lay on the table in that cold, dark room, stripped of all the elements everyone associated with my supposed success, the thought struck me, I could die from this cancer! — Azinger, Paul (1995) *Zinger*

◆I borrowed some sleeping bags from a couple from Georgia who'd just moved to town and, of course, I nearly died from that experience. — *CNN news 96/02/01*

第 1 例で，this cancer というのは今，現実に主人公の身体を冒している「その特定の癌」である。故に of に換えることは不可。第 2 例でも，主語の「私」が歴史上の 1 時点に於いて経験した特定体験を指す。

4－2．explosion, outbreak など語義が直ちに「死因」に結びつくとは言えない名詞は「原因」を明示する必要から from が選ばれる。

◆At least 114 people died from an explosion in a coal mine in northern Shanxi province. — *Miami Herald 96/12/13*

◆People are dying from an outbreak of cholera.

◆Mrs Edwards's partially clothed body was found by her daughters, Katie, 6, and Ellie, 3, on Thursday. She had suffered facial injuries and died from pressure to the neck. — *Times 2000/05/30*

4－3．本来，死因と直接に結びつきにくい目的語は of への転換不可。

◆Your chances of dying from skiing: 1 in 500,000. — *USA Today 91/03/28*

◆ ... and subsequently died from the prescription medication she gave him — *Los Angeles Times 98/08/17*

◆"There's lots wrong with me," the stranger replied. "This here leg has got a bullet in it, for one thing."

Mandie gasped. "A bullet?"

"Who shot you?" Joe demanded.

"I guess I might as well come clean, or I'll die from this leg," the stranger said.

— Leppard, Lois Gladys (1988) *Mandie and the Mysterious Bells*

スキーで死ぬとは，スキーをしている間に事故に遭い，それが元で命を落とすことである。スキーというスポーツ自体が死をもたらすと考えることは不可能なので，当然，「原因」を明示する from を用いなくてはならず，of を選ぶことはできない。2番目の例にある 処方薬（prescription medication）も本来，患者を治療するためのものであり，それが死因になることは，通常は想定されていない。故に of は用いられない。

最後の例は脚を撃たれた男と子供たちの会話である。「脚」自体が死因となることはない。この例で分かるように，from はそれ自体，原因を明示する力があるゆえ，その因の存する場所である「脚」を指定しても構わないのである。

4－4.　「原因」を表す目的語 cause (22/15); causes (182/729)

「原因」でも単数・複数形での from/of の出現頻度をみると，明らかに単数 cause の方のほうが，from と共起しやすい。これは単数の方が，特定の場面の具体的な死因により容易に言及できるからである。死因を一般的に類別する場合は複数形を使うことが普通であるので当然ながら of の比率が高まる。

cause/causes は単独では用いられず，必ず die from/of natural causes の 'natural' のように修飾語を伴う。複数形の causes の911例のうち，実に615例が 'natural' であり，この 'natural' を含め 'AIDS-related', 'coronary', 'causes connected to ～' のように「死因」の大よその所属や性格を示すものが大多数をしめる。その他は 'these', 'the same' など明確に identity を与えるもの，'other' のように死因の別の所属を指定するもの，'unknown', 'mysterious', 'unspecified' などのように死因の identity が特定されないことを表すもの，'a variety of', 'a range of' など多様性に言及するものに大別される。

natural causes (89/562) に対して unnatural causes (6/1) （「不自然な原因」）は，死の「原因」が問題視される場合が多く，from が多かった。次の3文を対照して欲しい。ただし，第3の例文のように，当時は「不自然な死」がごく普通におこる出来事であったという脈絡では，予想されるように of が用いられている：

◆Your father didn't die of natural causes so there'll have to be an inquest. — Gaskin, Catherine (1951) *All Else is Folly*

◆"I can't help thinking," she said somewhat reluctantly, "he must have died from unnatural causes — like being the victim of a crime." — Keene, Carolyn (1995) *The Case of the Dangerous Solution*

◆He told friends that 40 million people "died of unnatural causes" during Mao's Cultural Revolution — *Washington Times 91/11/10*

さて単数形の 'cause' と結びつく修飾語を見てみよう。単数形は，複数形と比べると死因により強い特定性を賦与するとはいえ，'natural', 'known', 'unknown' などと結びついて一般的死因を与える場合は of と共起する。

◆As far as we know to date, Paddy died of the natural cause of heart failure perhaps brought on by his having mistaken the medicines he was taking. — Gill, Bartholomew (1992) *The Death of Love*

◆A homeless man is treated by Dr. Guy Luthan (Hugh Grant) before dying of an unknown cause. — *Miami Herald 96/10/11*

◆SCD (sudden cardiac death) is not used to describe only the death of those who have died of an obvious cardiac cause, such as coronary heart disease, but ... — *Times 96/10/23*

しかし 'unnatural', 'some other', 'the same', 'no apparent' などと結びついて「原因」の特異性や identity などを特別，問題にする場合は from と結びつく傾向が強い。

◆Investigations obviously have to be made in Paris into what has happened. But if anyone dies abroad from an unnatural cause, we have to hold an inquest. — *Times 97/09/02*

◆In 1977 his partner Diana Hyland, 19 years his senior, died in his arms from cancer. His mother, Helen, died from the same cause a year later. — *Times 2001/07/28*

◆Shaw had told him about the bite on the arm she had received from a delirious woman patient who had since died from a cause no one had yet been able to discover. — Ruhen, Carl (1988) *Young Doctors 2*

4－5. 「結果」を表す目的語 effect(6/1), effects (89/13), consequences (5/1)

「原因」を表す cause/causes は from/of 両方が可であるが，「結果」は特定の状況の中でもたらされた状態に言及したものなので，単数形の effect の場合は，通常 from のみを許す。[3)]

◆Millions of people would die immediately from/**of* the direct effect of the blast. — *Time Magazine 90/05/14*　［斜体は筆者］

◆When "Dolly" (a not very apt nickname) died from the consequences of Aids, ... — *Guardian 96/09/25*

しかしながら複数形 effects となると病気の結果生じる「一定の症状群」という意味で用いられることが多い。これらの症状は病院関係者のごく普通に経験するところなので of の例もかなり多くなる：

◆Like her father before her, she died of the effects of Alzheimer's disease. — *Independent 2002/04/02*

4－6.　「事故」を表す目的語 accident (19/4); accidents (45/8)

事故とは本来偶発的なもの，予期されていないものである。故に事故による死では原則として，原因が強く意識され，from を用いることが多い。

◆Constance Berube was born in Munising, six months after her father, Omer Berube, died from a car accident. — *Detroit Free Press 97/12/29*

ただし，少数ではあるが，of をとる場合もある。例えば墓標に死因を記すことは一般的慣行であるが，そのような脈絡では，die の次にくる語が死因を記すのは当然とことと考えられ，of が用いられる。この場合，事故は一般のさまざまな死因の 1 つとして取り扱われる。from を使うと，反って不自然となる。

◆On the makeshift wooden cross Jim had painted: "Henry Craig. Died of/*?from* Accident 1888." — Mitchell, Elyne (1982) *The Man From Snowy River*［斜体は筆者］

しかし，次例では「事故か病気で死ぬ」という文脈で用いることによって，「事故」は話し手にとって原因を問題とするものではなく，単に死因の 1 つに格下げされている。故に of：

◆If Jeremy had died of an accident or illness, she would have gone through that normal period of bereavement, but it was the way he had died that had tormented her. — Freeman, Cynthia (1988) *The Last Princess*

ついでながら，事故死には from/of よりもむしろ in を用いるのが普通である：

◆His father, a travelling salesman, died in a car accident three months before Mr Clinton was born in 1946. — *Daily Telegraph 92/07/14*

ただし，in の場合，死の訪れは事故のあった時点であると明示されるのに対して，from では必ずしも事故と同時である必要はない。死をもたらした原因が事故なら，死は数日を経た後に起こってもよいのである。

4－7. 「-ing 形」の目的語

-ing 形は本来，個々の具体的な状況を想定するので原則として from のみ可。

◆He died from having his head chopped off.

◆When you married her, I thought I'd die from being so miserable. — Monk, Connie (2000) *From This Day Forward*

動名詞が目的語を伴うときは，概念を一般化してもなお from の方が自然である：

◆You can die from/?*of* loving someone too much. ［斜体は筆者］

5．from/of 両方が用いられる場合

概ね，具体的な状況を描写する目的語が続く場合は from が用いられる傾向がつよく，目的語が一般概念化した名詞になっているときは of との相性が良くなる。しかしながら，具体的な状況といっても，それが繰り返し起こることとして認識されはじめると of との組合せも不自然でなくなる傾向にあり，また一般的な死因であっても，それを個々の状況に関連させてより具体的に表現したいという意図が働くときには，from が用いられる。話し手が，聞き手に対して，状況を一般的概念としての死因の 1 例として提示しようと思うときには of が選ばれる。しかし，状況を聞き手の眼前に具体的な絵として描き出そうとするときには from を用いることになる。

かくして die from は die of よりもより具体的・特定的な場面を描くときに用いられると言えよう。次の 2 つの例を見てみよう。

◆A mother who nursed her son through chickenpox has died from a rare form of pneumonia connected to the disease. — *Daily Mail 97/03/31*

◆Mokaba ... was 43 when he died of acute pneumonia linked to a respiratory problem — *Independent 2002/06/13*

第 1 例では同じ肺炎でも通常見られない珍しいタイプである。だからこそ話し手は，このケースを特別のものとして扱う価値があると判断し，この特定の肺炎に聞き手の注目を集めるべく from を用いている。他方，第 2 例の「急性肺炎」は単にごく普通に見られる月並みな死因として聞き手に提示されているに過ぎない。

次の２つの例でも，第１の例文の bleeding は「出血」という名詞だと見なしうるのに対して，第２の文の bleeding inside the skull は動名詞であり，「頭蓋骨内で出血すること」という，出血場所に関してより特定化された，より具体的な描写となっている：

◆He concluded that she died of bleeding and inhalation of her own blood. — *Daily Telegraph 92/06/03*

◆He died from bleeding inside the skull but did not have a stroke as was first announced, — *Washington Times 92/09/08*

5－1. 「出血」を死因とする事例を統計的に集計した結果

die from/of + hemorrhage (10/92) 「最初の数字が from の件数，次が of の件数」

die from/of + hemorrhaging (3/13)

die from/of + blood loss (10/16)

die from/of + bleeding (46/30)

die from/of + loss of blood (33/2)

hemorrhage という名詞が目的語の場合は of が圧倒的に多く出現するが，hemorrhaging と -ing 形にすると from の比率が高まる。予期した通り，bleeding とすると，さらに from が好まれている。驚くのは名詞であっても，loss of blood「血を失うこと」では圧倒的に from が多くなる。これは loss of blood = losing blood と受け取られるためである。「血を失う」という節構造をもつ目的語は，特定の具体的場面に言及する傾向がより強くなる。動名詞 bleeding は，bleeding 自体が直接目的語を伴わない場合は，ほぼ名詞化しているとみなすこともできるので，loss of blood は bleeding と比べて，さらに具体的な状況を描いていると感じられている。blood loss という節構造を持たない名詞句では，of の比率が随分高くなっている点に注目してほしい。名詞化することはジャンル化することであるからである。

5－2. 「煙」または「喫煙」を死因とする事例を統計的に集計した結果

die from/of + cigarette/marijuana smoke (0/2)

die from/of + smoke (6/0)

die from/of + smoking (23/8); die from/of + cigarette smoking (1/1)

die from/of + smoke inhalation (39/126)

die from/of + inhaling smoke (6/0)

ふつう煙によって直接に死ぬことは少ないと考えられるようで die of smoke という用例は出現

しなかった。煙にまかれて死んだときには，それを「原因」として特定する from を用いるのである。ところが，タバコやマリュワナの煙となると，それが健康被害を起こすというのは周知の事実であり of が用いられる。
smoking（喫煙）は健康を害することが知られているので of も可。しかし smoking hashish/marijuana のように目的語を伴う動名詞は全て from と共起した。smoke inhalation には of の事例が多く，inhaling smoke となると from のみ用いられるのも，やはり予想された通りである。

6．終わりに

これまでの考察から分かるように，die of と die from は一見，相互転用が可能なように見えるが，実は話し手が聞き手に対して，いかに状況を伝えたいと思っているかよって使い分けられていると判明した。die of を用いるとき，話し手は聞き手に対してジャンルとしての死因を伝えれば十分であると考えている。die of が用いられる文脈では，「ある人が死んだ」という事実を伝えるのが伝達の主目的であることが多く，それに付随する形で死因が提示されている。一方，die from は殊更，死の原因を問題にする傾向がある。誰かが死んだという事実よりも，むしろ死因そのものが伝達内容の中心を占める。また，問題の死が生起した具体的な歴史的事実を踏まえた上で，その特定の死の「原因」が from によって明示されるのである。まさに今，眼前の死の「原因」を問うているのであり，死因がどのようなジャンルに所属するものかを問題にしているのではない。以上ことから，今日，日本で一般に用いられている英和辞典や英米で出版されている代表的辞典ばかりか，語法辞典の説明も十分でないことが分かる。コーパスを分析してその考察結果を取り入れる必要がありそうである。

注

1）He died of fighting in the Vietnam War. という言い方は不自然である。これは単なる説明の誤りか，でなければ He died (in) fighting in the Vietnam War. の誤植であろう。He died from the fighting in Vietnam. ならば可。

2）言うまでもないが，このカテゴリーに属するものは上の a, b, c にも同時に含まれる場合もある。また a と b などの区別も判然としているわけではない。

3）しかし，この「結果」がごく習慣的に経験されるタイプのものであれば，それに一定の名がつく。次の例は病理的結果に名称が与えられ，それが死をもたらした病名と見なされるようになり of が可能となったもの：

◆An autopsy shows that the victim died of the exaggerated allergic effect called anaphylactic shock.
— *Washington Times 95/05/14*

使用コーパス

CNN 1994-1996; 2000/01/01-2004/05/26

The Daily Mail 1997

The Daily Telegraph 1992/1996/2002

The Detroit Free Press 1997

The Guardian 1996

The Independence 2002/2003

The Los Angeles Times 1996/1998/1999

The Miami Herald 1995/1996

The Philadelphia Inquirer 1993/1994

The Times and the Sunday Times 1996/1997/2000/2001

Time Magazine 1989-1994

The USA Today 1990/1-1992/8

The Washington Times 1991/1992/1995

私的コーパス（英米の散文）

参照文献

Cambridge Advanced Learner's Dictionary. (2003) Cambridge University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English, new edition. (2003) Longman.

NTC's Dictionary of Phrasal Verbs and other idiomatic verbal phrases. (1993) National Textbook.

Oxford Advanced Learner's Dictionary, 6th. edition. (2000). Oxford University Press.

小西友七.『英語前置詞活用辞典』(1974) 大修館.

小西友七・南出康世（編）(2001)『ジーニアス英和大辞典』大修館.

東信行（編）(1994)『研究社-ロングマン句動詞英和辞典』研究社.

（おかだ・あきら　外国語学部教授）